

飼育レポート

「出前ふれあい教室」を実施して

飼育展示担当
近藤 百愛



今年度から動物園のスタッフが、実際に学校へ行つての「出前ふれあい教室」が試行的にスタートしました。生き物に直接触れたり、親しんだりする機会が不足している現在、動物とふれあうことで「いのち」を考えるきっかけになってもらえたらと思っています。命が大切なものだと頭ではわかっている、生き物との距離がだんだん遠くなり「いのち」の実感がつかみにくく、「いのち」を感じる実体験が不足していると言われる今の時代、どのように「いのち」を伝えていくのか、これからの動物園が果たしていく重要な役割の一つとなるでしょう。

「出前ふれあい教室」では動物園で実施している「ふれあい教室」と同じようにウサギ、モルモットなどの小動物に触ったり抱っこすることが出来ます。動物を抱っこした経験のない子どもの中には、動物のツメがあたると「痛い」と大騒ぎをして放り出してしまう場合

があります。きつく抱かれている動物の立場にたって考える余裕もなく、動物は自分を気持ち悪くて痛くする存在となってしまうのです。動物も生きているんだと気づくことで、動物の立場に立って考え、どう抱っこしてあげたら安心してくれるかを考え工夫していくうち、初め緊張しこわばっていた顔が動物が安心していくのを感じて笑顔に変化していきます。

しかし、動物に触ってただ可愛かった、触れて良かっただけでは何の意味もありません。その後にするのが子ども達の「いのち」の実感にとって重要になってくるのではないのでしょうか。動物園ではそのためのきっかけを作る事はできても、その後に携わっていくことが困難です。子どもたちの「いのち」の大切さを実感するためには教師、学校、保護者、動物園などが連携していくことが大事なのではないのでしょうか。

動物病院から

ワピチの移動

飼育展示担当（獣医師） 高橋 広志



ほとんどの草食獣にとって秋から冬にかけては恋の季節。普段は扱いやすい動物たちもこの期間は大変気が荒くなり飼育担当者が危険にさらされます。



先日、凶暴になってきたワピチのオスを隔離するため、展示場を移動させる作業がありました。オスのワピチは、草食獣とはいえ体重300kgを越える体に大きくて鋭い角をもつある種猛獣です。人が展示場に一緒に入るとウシやウマのように誘導する事などまずできません。

それならば、麻酔をかけて動けないところを運べば簡単そうに思えますが、完全に眠って脱力した巨体を人の力で運ぶのは不可能に近い業です。泥酔した人間1人を運ぶのにも、大人3人掛かりになるのを想像すれば納得してもらえるでしょうか。

そこで、ポーっとして人に危害を加えない程度の浅い麻酔（鎮静といいます）をかけて、自分の脚で歩いて移動してもらうことにしました。

口で言うのは簡単ですが、正確な体重は分からないし、麻酔薬も吹矢で何本も射つことになります。また、麻酔が強すぎて倒れ込んでしまったら元も子もなく、直前までいろいろと心配事は絶えませんでした。麻酔が効き始めると、ワピチはふらふらと立っているのがやっとの状態になって、千鳥足ながら隣の展示場へずんわりと移動してくれました。

大きな動物に麻酔をかけるのは、いつもながら心身共に疲れる仕事です。